

2019 年度博士論文（要約）

フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能向上プログラムの開発

桜美林大学大学院 老年学研究科 老年学専攻

服部 ユカリ

## 目次

第1章 序章	
1. はじめに	・・・ 1
2. 用語の定義	・・・ 1
第2章 本研究の目的と意義	・・・ 2
1. 目的	・・・ 2
2. 意義	・・・ 2
3. 研究の構成	・・・ 2
第3章 研究1「地域在住高齢者の写真に関する実態の解明」	
1. 目的	・・・ 2
2. 対象	・・・ 2
3. 方法	・・・ 2
4. 結果	・・・ 3
5. 考察	・・・ 3
第4章 研究2「介護予防教室に導入したフォトボイスの効果ー参加者の FGI からー」	
1. 目的	・・・ 3
2. 対象	・・・ 4
3. 方法	・・・ 4
4. 結果	・・・ 4
5. 考察	・・・ 4
第5章 研究3 「フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能の維持・向上をめざす介護予防プログラムの開発」	
1. 目的	・・・ 5
2. 対象	・・・ 5
3. 方法	・・・ 5
4. 結果	・・・ 6
5. 考察	・・・ 7
第6章 総括	・・・ 8
文献	・・・ 9

## 第1章 序章

### 1. はじめに

高齢者が、社会の中で、できるだけ自立して、自分らしく生活していくためには、生活の場での活動やそれを通じた他者との交流を含む生活機能の維持・向上が重要である。本来の介護予防の目的である生きがいや自己実現を支援するためには、高齢者が自ら自身に必要なものに気づき、自分にふさわしい活動を見出し、主体的な自己決定によって継続的に参加し、生活機能を高めることができるようになることを支援するプログラムが必要である。生活機能を高めるためには、一時的な行動の変化ではなく、変化した行動や選択した活動を継続することが必要であり、その積み重ねにより生活機能が維持され、徐々に高まっていく。そのためには、自らの生活上の問題を主体的に解決することのできる力を獲得すること、すなわちエンパワメントが必要である。エンパワメントは、すべての人の潜在能力と可能性を引き出し、質の高い人生を送ることのできるよう、その個人を力づけるという観点で捉えられ広い分野で取り入れられている。WHOは、ヘルスプロモーションとは人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスであると定義し、エンパワメントの概念を強調している。

住民をエンパワメントする手法として、研究者も現場の人たちとともに民主的な立場で問題解決に参加し、現場に永続的な変化をもたらす改善することを目指すアクションリサーチがある。その一つにフォトボイスがある。これは、参加者が撮影した写真とそれについての自身の語りを題材にしたグループでの話し合いをとおして問題解決のための行動を促す手法<sup>2)</sup>であり、1990年代 Wangらが公衆衛生分野の研究手法として開発した。

フォトボイスを用いた研究は、海外では公衆衛生学、社会福祉学、心理学など様々な分野において、高齢者を含む幅広い年齢層で実施されているが、日本では数件のみである。

写真の心理的効果については写真を「見る」ことにより、自己イメージの改善や自尊心が高まるという報告<sup>3)</sup>や、写真撮影が、「自律性・有能感」を育むことが示唆されている<sup>4)</sup>。また、写真を見ながら対話することは、視覚に訴えるため、内容を共有することが容易になる。写真を撮影し、見ることに加え、それについて語るというフォトボイスは、自己決定に関する自律性を高め、有能感を生むとともに相互理解が促進され、エンパワメントに繋がる可能性があるが、高齢者に対するフォトボイスを用いた介護予防プログラムは開発されていない。研究者らは、写真撮影を部分的に取り入れた介護予防プログラムを自治体と連携して2011年から継続的に実施し、認知機能や学習に関する満足度が高まり、生活機能が変化する可能性の示唆を得ている<sup>5)~7)</sup>。この蓄積をもとに、フォトボイスを取り入れた介護予防プログラムを開発することが可能と考えた。

### 2. 用語の定義

・生活機能：ICFの「心身機能・構造」、「活動」、「参加」から構成される、人が生きていくための機能全体とする。また、「心身機能・構造とは、体の働きや精神の働き、または体の一部分の構造、活動とは、生きていくのに役立つ様々な生活行為であり、能力と実施状況の2側面がある。参加とは、社会的な出来事に関与し、役割を果たすこと」<sup>8)</sup>とする大川の定義を用いる。

・エンパワメント：「高齢者が自身の内なる力を引き出し、生活を主体的に調整し決定する力を高めていくこと」とする。

・フォトボイス：Wang らが開発した「参加者が撮影した写真とそれについての自身の語りを題材にしたグループでの話し合いをとおして問題解決のための行動を促す手法」とする。

## 第2章 本研究の目的と意義

### 1. 目的

本研究の目的は、フォトボイスを用いて、地域在住高齢者がエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながる介護予防プログラムを開発することである。

### 2. 意義

フォトボイスを用いたプログラムにより生活機能の維持・向上が可能になれば、新たな介護予防の方法として活用できるだけでなく、QOLの向上へ寄与し、地域エンパワメントやヘルスプロモーションへの拡大が期待できる。

### 3. 研究の構成

本研究は次の3つから構成される。

研究1では、高齢者の写真に関する基礎的なデータを収集し、高齢者に対して、写真を媒体として活用できるかを探索するため地域在住高齢者の写真に関する実態を解明した。研究2では、介護予防プログラムの一部としてフォトボイスを取り入れたプログラムを作成し、高齢者の生活機能を高める可能性があるかを探索した。研究3では、研究2の結果をもとに、フォトボイスプログラムを改善し地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能向上を目指す介護予防プログラムを開発した。

## 第3章

### 研究1 「地域在住高齢者の写真に関する実態の解明」

#### 1. 目的

地域在住高齢者の写真に関する基礎的なデータを収集し、写真を撮る高齢者の属性を明らかにし、写真を媒体として活用できるかを探索する事を目的とした。

#### 2. 対象

北海道H市A地区在住の65歳以上の住民で健康講座に参加した者、および地区活動やクラブ活動などの活動に参加した者とした。

#### 3. 方法

無記名自記式調査票によりデータを収集した。調査項目は、属性、老研式活動能力指標、家族・友人との交流、写真鑑賞の好き嫌い、日常的な写真撮影状況等とした。分析方法は、写真鑑賞、写真撮影、カメラ機器の所有と各変数との関連について $\chi^2$ 乗検定を行った。

調査期間は、平成28年10月20日から30年9月16日であった。

#### 4. 結果

##### 1) 回収数および対象者の属性

対象者は 169 人であり、男性 70 人 (41.4%)、女性 99 人 (58.6%)、平均年齢は、74.6 ± 5.7 歳であり、年齢は範囲 65 歳～94 歳で、独居は 40 人(23.7%)であった。老研式活動能力指標の手段的自立は、4.9 ± 0.4 点、知的能動性は 3.9 ± 0.4 点、社会的役割は 3.6 ± 0.8 点、合計は 12.4 ± 1.4 点であった。

##### 2) カメラ機器の所有・写真鑑賞・写真撮影の状況

デジタルカメラを所有している者は、120 人(71.0%)、カメラ機能付き携帯電話を所有している者は、140 人 (82.2%)、両方所有している者は 105 人 ( 62.1% )、両方とも所有していないのは 14 人 (8.3%) であった。1 人を除き写真鑑賞は「非常に好き」「まあ好き」であった。写真を「しばしば撮る」は、38 人 (22.5%)、「時々撮る」は 69 人 (40.8%)、「あまり撮らない」は 35 人 (20.7%)、「まったく撮らない」は 27 人 (16.0%) で、6 割以上が写真撮影をしていた。

##### 3) 写真鑑賞と属性・生活状況

写真鑑賞が「非常に好き」な者は、「まあ好き」に比して、写真撮影をする ( $p < 0.001$ )、デジタルカメラを所有している ( $p = 0.001$ )、カメラ付き携帯を所有している ( $p = 0.030$ ) 者が有意に多く、性・年齢区分では有意な差は認められなかった。

##### 4) 写真撮影と属性・生活状況

写真を撮影する者は、撮影しないに比して、独居ではない ( $p = 0.018$ )、老研式活動能力指標の知的能動性が満点 ( $p = 0.001$ )、社会的役割が満点 ( $p = 0.011$ )、合計点が満点 ( $p = 0.017$ )、家族・親戚との交流が 5 人以上 ( $p = 0.017$ ) の者が有意に多かった。性・年齢区分・健康度自己評価・通院の有無では有意な差は認められなかった。

##### 5) カメラ機器の所有と属性・生活状況

デジタルカメラとカメラ付き携帯を両方所有しているのは、いずれかを所有しているに比して、男性 ( $p = 0.025$ )、独居以外 ( $p = 0.016$ )、写真鑑賞が非常に好き ( $p = 0.014$ )、写真撮影をする ( $p < 0.001$ ) 者が有意に多く、年齢区分、老研式活動能力指標では有意な差は認められなかった。

#### 5. 考察

本研究で、自立した地域在住高齢者は写真鑑賞を好み、カメラ機器を所有しており、また写真撮影をするものは、知的能動性が高く、社会的交流も活発である一方、性や年齢には関係しないことが分かった。カメラ機器について本研究では、90%以上がカメラ機器を所有しており、市場調査の結果<sup>9)</sup>からも高齢者にとって写真撮影は身近に関心が高いものであった。本研究により、一定の活動性がある高齢者に対して介護予防プログラムに写真を媒体として用いることの有用性が確かめられた。

#### 第 4 章

##### 研究 2 「介護予防教室に導入したフォトボイスの効果—参加者の FGI から—」

##### 1. 目的

研究 2 では、写真を用いるフォトボイスの手法を介護予防教室のプログラムの一部として取り入れ、高齢者の生活機能を高める可能性を探索することを目的とした。

## 2. 対象

介護予防教室の対象者は、北海道 H 市在住の 65 歳以上の要介護認定を受けていない者であり、本研究の FGI 対象者は、この介護予防教室に最後まで参加した 34 人のうち、各グループから選定した 7 人とした。

## 3. 方法

### 1) 介護予防教室のプログラムとフォトボイスプログラム

介護予防教室の内容は、ウォーキングとミニ講話にフォトボイスを加えた複合プログラムとした。参加者を、5-6 人ずつのグループに分け、全 13 回を平成 29 年 5 月 10 日から 29 年 10 月 25 日までに実施した。ウォーキングプログラムは、ウォーキングの記録をつけ、教室参加時に報告するもの、ミニ講話は、生活と健康に関連する内容であった。フォトボイスプログラムは、カメラの機能と写真のプリントアウトの方法を覚え、テーマに関する写真を撮って持ち寄り、それについてグループで意見交換をし、最後に写真集を完成させた。写真のテーマは、前半の 4 回は、各グループで自由に決め、後半の 4 回は、自身や生活について振り返るよう、運動、役割、楽しみ、健康とした。

### 2) データ収集方法・分析方法

教室の全日程終了後に、FGI を行い、フォトボイスや教室の感想について尋ねた。FGI を録音し、逐語録に起こし、質的統合法 (KJ 法)<sup>10)</sup>で分析した。

## 4. 結果

FGI の参加者は 7 人であり、男性 2 人、女性 5 人であった。

FGI の逐語録から生成されたデータラベル数は、79 枚であった。4 段階を経て 6 枚の最終ラベルに集約され、次の構造が見いだされた。「苦労する撮影までの過程が脳への刺激」という『思考の促進』の結果、「参加者同士の良い刺激と楽しい経験による交流の深まり」という『相互理解』と相まって「自分自身を見つめ直し、将来を見据えた学習と目標発見の契機」という『自己理解』が進み、さらに「外出の促進、積極的な活動の後押し、地域への関心の高まり」という『視野と行動の拡大』がもたらされた。一方、「テーマの決め方と写真技術の向上」という『参加者の課題』と「全員の写真を見る機会、対話の場、写真集という共有の機会の充実」という『プログラムの課題』もあった。

## 5. 考察

テーマについて写真を撮るためには、テーマの意味を考え被写体を自分で決めて撮るというフォトボイスの手法の特性が『思考の促進』をもたらした。また、『相互理解』や『自己理解』は、他者との交流を基盤として自分自身の問題を意識化することを示しており、フォトボイスプログラムによってエンパワメントプロセス<sup>11)</sup>をたどっていることを示している。また、自身やプログラムの課題があがっているのは、より良くしたいという意欲であり、

‘わがこと’として主体的にプログラムに関わっていることを示しており、参加者がエンパワメントしたことの一つの現れと考えられる。さらに「外出の促進、積極的な活動」は、活動の増加や拡大を意味し、「地域への関心の高まり」は今後の地域での活動への参加の可能性を表し、フォトボイスにより生活機能への波及したことを示している。

フォトボイスの手法を取り入れたプログラムは、参加者をエンパワメントし、生活機能への波及効果があり、介護予防プログラムに取り入れる有用性が示された。しかし、今回はフォトボイスの手法を介護予防の複合プログラムの一部として取り入れたものであり、他のプログラムの影響を排除できない。また、対照群を設けていないこと、質的探索的な研究方法であることの限界があり、それらを考慮した研究が必要である。

## 第5章

### 研究3 「フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能の維持・向上をめざす介護予防プログラムの開発」

#### 1. 目的

介護予防プログラムとしてフォトボイスの手法を単独で使い、地域在住高齢者が主体的に参加し、生活機能の維持・向上を目指す介護予防プログラムを開発することを目的とした。

#### 2. 対象

##### 1) 募集方法

北海道 H 市 A 地区在住の住民組織等に、募集チラシの配布と参加者の勧誘を依頼した。

##### 2) 割り付け方法

乱数表を用いて応募者をフォトボイス群と講話群の二群に割り付けた。ただし、地域在住高齢者を対象にするので、倫理的配慮から全員が、クロスオーバーでフォトボイスプログラムと講話を経験できるようにした。キャリーオーバー効果を否定できないことおよび研究目的から、前半のフォトボイスと講話が終了した時点のデータのみを分析した。

##### 3) グループ編成

フォトボイス群は、性・年齢・生活背景を考慮して5-6人を1グループとして編成し、講話群は、グループ編成は行わなかった。

#### 3. 方法

##### 1) フォトボイスプログラムの開発

フォトボイスの先行研究と研究2の結果を基に、テーマ、内容、ファシリテート方法を考案した。

###### (1) プログラムのテーマ

高齢者の多くが関心のある認知症予防をきっかけとして自身の生活全般をみなおし、生活機能の維持・向上をめざすことをテーマとした。

###### (2) プログラムの骨子

・プログラムのテーマに沿った撮影テーマを研究者が設定するが、研究2の結果からできるだけ参加者が自主的にテーマを設定できるようにした。

- ・撮影テーマの提示、撮影、撮影した写真についてのグループ対話を行う。対話は、「何を映したか、なぜそれを映したか、それを映したことで何を考えたか」を中心に話し合う。
- ・グループの中で課題が明確になり、達成可能な生活の目標が定まるようにする。最後に「みんなで元気に暮らすための10箇条」を考える。
- ・批判せず、発言内容を受け入れるなどの対話の原則を参加者に事前に伝えた。

### (3) ファシリテーター

グループに1人ずつ地域包括支援センター保健師、精神保健福祉士、看護師等を配置した。ファシリテーターには、事前に研修を実施した。

## 2) 実施期間

初回の説明会の後、フォトボイス群は5月16日～7月25日、講話群は5月14日～7月23日の期間に毎回1時間8回ずつ実施した。

## 3) プログラムの評価枠組み

Howeらの評価の枠組み<sup>12)</sup>を参考に、プロセス評価としてプログラムの質を、影響評価としてエンパワメント・精神的健康状態、結果評価として生活機能について、それぞれ量的調査と質的調査を行った。

## 4) データ収集方法

量的調査は、説明会で認知機能検査、第1回にベースライン調査、第8回に認知機能検査・質問紙調査を実施した。質的調査は、8回終了後フォトボイス群6人、講話群5人を対象に別々にFGIを実施した。

## 5) 量的調査項目

- (1) 参加者背景：性別、年齢、家族人数、健康度自己評価
- (2) プロセス評価：出席率、出席回数、満足度
- (3) 影響評価：歩行意欲時間、WHO-5、K6、認知異能低下の自覚
- (4) 結果評価：ファイブログ、老研式活動能力指標、外出頻度、活動参加数

## 6) 量的調査の分析方法

ベースライン値を共変量とする一般線型モデルを用いた反復測定による共分散分析を行い、群の要因と(群間要因)と時期の要因(群内要因)の交互作用の有無を検討した。次に、全回出席した者について両群を同様に分析した。

## 7) 質的調査の構成

プロセス評価、影響評価、結果評価の視点でFGI、事例、グループワークの最終成果物からデータを収集し、FGIは質的統合法(KJ法)で、事例とグループワークの最終成果物は質的記述的に分析した。

# 4. 結果

## 1) 対象者の属性

応募者77人を乱数表により、フォトボイス群39人、講話群38人の2群に割り付けたが、キャンセル者・脱落者と認知症やMCIの疑いがある者を除外したところ、フォトボイス群23人、講話群28人が分析対象となった。フォトボイス群は、男性10人、女性13人、講話



群は、男性 7 人、女性 21 人であり、年齢、教育年数、家族人数等に両群で有意な差はなかったが、自覚的健康度については、「健康でない」が講話群に有意に多かった ( $p=0.013$ )。

## 2) 量的調査

プロセス評価では、出席率・満足度は両群ともに高かった。

影響評価では、全分析対象者および全回出席者で、認知機能低下の自覚はフォトボイス群がやや改善したが、講話群では悪化し有意な交互作用が認められた ( $p=0.01$ )。全回出席者で、歩行意欲時間は、フォトボイス群が上昇したのに対し、講話群は低下し有意な交互作用が認められた ( $p=0.05$ )。それ以外の指標では有意な差は認められなかった。結果評価では、有意な差は認められなかった。

## 3) 質的調査

FGI では、フォトボイス群は、93 枚のラベルが生成され、7 枚に集約され、『交流の成果』『問題意識の深化』『内なる力の変化』がおきていた。さらに『生活への活用』『地域活動への活用』への波及がみられた。講話群では、64 枚が 6 枚に集約された、『加齢の受け止め』『認知機能検査に対する肯定的評価』『認知機能検査による気づき』、『教室の良い点』等があがった。代表的な 1 事例では、主体的に課題に取り組み、新しい活動を取り入れる状況が示された。グループワークの最終成果物の内容 48 個あり、『気持ちの持ち方・心がけ』、『望ましい活動』、『社会的な役割への関心と参加』の 3 つに集約された。

## 5. 考察

出席率、満足度共にフォトボイス群・講話群共に高く、差は認められなかった。両群とも参加者はプログラムを良好と評価していると考えられ、フォトボイスのプログラムは、講話と同等の質と評価できる。フォトボイス群で認知機能低下の自覚が悪化しなかったことは、認知機能に関する不安を助長しなかったといえる。歩行意欲時間の延長は、自己効力感が高まっていると考えることができる。全対象者では変化はなく、全回出席した者で、有意に変化し参加率が高いほど効果が現れたと考えられる。フォトボイス群の FGI では、エンパワメントのプロセスである「他者との相互作用」「自身の客体化」「新しい価値観の獲得」が見られ、また事例では、「主体的実践行動」「意欲」が見られている。量的調査と質的調査の結果から、フォトボイス群では、講話群と異なり、エンパワメントが生じていると考えられる。これは、写真を元にした対話というフォトボイスの手法が、代理体験<sup>13)</sup>を容易にし、自己効力感を高めたと考えられる。

生活機能に関して、量的調査では有意な変化は認められなかった。これは、プログラム実施期間の 2.5 ヶ月では、評価指標に現れるまでには至っていないことが考えられる。また、高齢者は、個人特性の違いが大きいことや影響要因をコントロールすることが難しいことがあげられる。質的調査では、フォトボイス群に、活動や参加の増加へ波及効果が見られたが、講話群では、それらは見いだされていない。グループワークの最終成果物では、『望ましい活動』、『社会的な役割への関心と参加』という活動/参加に関する内容が見いだされ、今後の生活機能の向上が期待できる。

開発したプログラムの実施期間は 2.5 ヶ月間であり、その後の生活機能を確認する必要があるが、今回は、フォトボイスを用いたプログラムを開発することを研究目的とし、倫理

的配慮からクロスオーバーで両群に同じプログラムを実施したため、フォトボイスプログラムの終了後のデータ分析は行っていない。今後、継続的な効果を評価する必要がある。

## 第6章 総括

フォトボイスを用いた介護予防プログラムは、地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながることを確認された。専門家の知識伝達や指導ではなく、参加者の相互作用により、当事者自身が望ましいと思う活動を認識し選択することを促す意義がある。「人生や生活の中で“したいこと”を“なじみの”環境の中でできる限り続ける」<sup>14)</sup> ための新たなプログラムとして介護予防に貢献できる。

## 謝辞

学位論文をまとめるに当たり、調査・分析に多くの方にご支援とご協力をいただきました。まず、プログラムに参加してくださった方々ならびに調査にご協力いただきました地域の皆様に心より御礼申し上げます。

本研究ならびに博士論文執筆にあたり、アクションリサーチの真髓をご教授いただくとともに常に的確なご指導をいただきました桜美林大学老年学研究科 芳賀博先生に心より感謝申し上げます。

学位論文審査において、貴重なご助言とご指導を賜りました桜美林大学大学院老年学研究科 渡辺修一郎先生、長田久雄先生、外部副査をお引き受け下さいました佐久大学学長 堀内ふき先生に厚く御礼を申し上げます。

研究を進めるに当たり、旭川医科大学医学部看護学科 牧野志津先生、野中雅人先生、旭川医科大学非常勤講師 大坪智美先生は、共に悩み考えていただきました。本当にありがとうございました。

また、申請書類等の提出について丁寧なご教示とご配慮いただきました桜美林大学四谷キャンパス事務職員の皆様に心より御礼申し上げます。

大学卒業以来見守ってくださった 千葉大学名誉教授 野尻雅美先生ならびに北海道医療大学名誉教授 中島紀恵子先生に深く感謝いたします。

常に心の支えである母 月橋薫に心より深い感謝を捧げます。

## 文献

- 1) 島内憲夫・鈴木美奈子：ヘルスプロモーション WHO バンコク憲章. 16-19: 垣内出版, 東京 (2012).
- 2) Wang, C., & Burris, M. : Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education and Behavior*, 24 (3), 369-387. (1997).
- 3) 石原真澄：写真表現実践(撮る・観る・語る)による自己探求：グループワークによる心理的效果に関する実践報告. *日本写真芸術学会誌*, 23(1)：31-37(2014).
- 4) 石原真澄：写真撮影の心理的效果に関する fMRI 研究 (<http://hdl.handle.net/10097/58422>, 2017. 5. 19 アクセス) (2015).
- 5) 作並亜紀子, 服部ユカリ：認知機能向上教室の効果に関する研究. *日本老年看護学会第 17 回学術集会*, 金沢 (2012).
- 6) 作並亜紀子, 服部ユカリ：高齢者の認知機能向上プログラムに関する研究. *日本老年看護学会第 19 回学術集会*, 名古屋 (2014).
- 7) 作並亜紀子, 服部ユカリ：高齢者の認知機能向上プログラムに関する研究. *日本老年看護学会第 20 回学術集会*, 横浜 (2015).
- 8) 大川弥生：よくする介護を実践するための ICF の理解と活用 目標試行的介護にたつて. 18-21 中央法規出版, 東京 (2009).
- 9) カメラ映像機器工業会：日本市場のデジタルカメラ購入者特性 (年齢別構成). (<http://www.cipa.jp/stats/documents/common/cr800.pdf#search> 2019. 7. 1 アクセス) (2019).
- 10) 山浦晴男：質的統合法入門 考え方と手順. 15-78, 医学書院, 東京 (2012).
- 11) 麻原きよみ：高齢者のエンパワメントー文化的見地からのアプローチ. *日本老年看護学会誌*, 5 (1)：20-25 (2000).
- 12) Penelope Hawe, Deirdre Degeling, Jane Hall 著, 鳩野洋子, 曾根智史訳：ヘルスプロモーションの評価 成果につながる 5 つのステップ. 131-160, 医学書院, 東京 (2003).
- 13) 江本リナ：自己効力感の概念分析. *日本看護科学学会誌*, 20(2), 39-45 (2000).
- 14) 株式会社 NTT データ研究所：平成 30 年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業 介護予防・日常生活支援総合事業及び生活支援体制整備事業の効果的な推進方法に関する研究事業報告書「介護予防・日常生活支援総合事業、生活支援体制整備事業これからの推進に向けて～伴走型支援から見てきた事業推進の方策～」, 37 ([https://www.nttdatastrategy.com/services/lifevalue/docs/h30\\_04\\_2\\_jigyohokokusho.pdf](https://www.nttdatastrategy.com/services/lifevalue/docs/h30_04_2_jigyohokokusho.pdf) 2019. 9. 1 アクセス) (2019).